

互いのまなざしが響き合う学習
一人一人への
確かなみとりと支援によって

CONTENTS

教育研究会のご案内・・・1・2・3
 学習紹介：「ありの行列のなぞを解こう」(国語科)・・・4
 学習紹介：「複式学級における理科学習」(理科)・・・5
 学習紹介：「一人読みが充実！付箋を活用したワークシート」(国語科)・・・6
 らいぶ インタビュー 「和歌山大学教授に聞く」・・・7
 らいぶ コラム：「食に関する指導の充実を目指して」・・・8

「意味と内容」がひろがる学びの創造（三年次）

互いのまなざしがひろがる学びの創造

～一人一人への確かなみとりと支援によって～



ごあいさつ

私はこの2年間、子どもたちと先生方にほぼ同じことを繰り返し話してきました。その一つは「授業でも行事でも、まずは友達や先生の話をよく聴こう」ということです。きっと教室で先生方が実践されているからでしょうか、最近子どもたちが徐々に「聴き合う」ことの大切さを身につけてきているように思うのです。本校では、この「聴き合う」関係をベースにして子どもどうしが互いに響き合い学び合う質の高い授業づくりに取り組んできました。午前の公開授業では、子ども一人一人のみとりを大事にしながら、子ども相互の聴き合う関係をつくり、子どもが向き合う学習対象(「学習内容と意味」)を吟味し、そして授業構成や学習形態にも工夫を凝らしています。午後からは、本校の研究のあゆみを報告します。記念講演では佐藤学氏から「協同的な学びによる授業と学校の改革」をテーマに、これからの日本の学校・教師・教育のあり方について国際的な視点からお話ししていただきます。ぜひ有意義な一日をお過ごし下さい。

学校長 松浦 善満

期 日 平成 1 8 年 1 0 月 2 8 日

日 程	8:15	8:40	8:55	9:00	9:45	10:00	10:45	11:00	12:30	13:45	14:30	16:00
	受付	朝の会	移動	研究授業	移動	研究授業	移動	協議会	昼食	概要発表	講演会	



主催・会場 和歌山大学教育学部附属小学校
 後 援 和歌山県教育委員会 和歌山市教育委員会
 和歌山県市町村教育委員会連絡協議会
 和歌山県連合小学校校長会

「協同的な学びによる授業と学校改革」
佐藤 学先生

研究授業 (9 : 0 0 ~ 9 : 4 5)

教科等	授業学級	単元・題材名	授業者	活動場所
図工	1 C	キラキラワールド	北山 成美	1 C 教室
国語	2 B	「かさこじぞう」	碓 起代	2 B 教室
体育	3 A	とびばこあそび	佐々木和哉	体育館
算数	3 B	大きい数をしらべよう	市川 哲哉	3 B 教室
算数	4 A	三角形	岡田 明彦	4 A 教室
国語	4 C	「一つの花」	大谷真喜子	4 C 教室
家庭	5 B	作っておいしく食べよう ～ごはんのみそ汁～	藤原ゆうこ	5 B 教室
社会	6 A	経済プロジェクト会議 ～松下幸之助の生き方と自分～	田中いずみ	6 A 教室
音楽	6 B	曲想を感じ取ろう	江田 司	第1音楽室
理科	6 C	電磁石のひみつをさぐれ！	中井 章博	理科室
国語	1・2 F	1年「くじらぐも」 2年「お手紙」	西村 充司	1・2F 教室
算数	3・4 F	3年「長方形と正方形」 4年「三角形」	坂本 桂	3・4F 教室
理科	5・6 F	5年「てんびんとてこのはたらき」 6年「電流がつくる磁石のはたらき」	辻本 和孝	5・6F 教室

研究授業 (1 0 : 0 0 ~ 1 0 : 4 5)

教科等	授業学級	単元・題材名	授業者	活動場所
生活	1 A	石	上田 恵	1 A 教室
体育	1 B	もほう・ひょうげん 「うみのなかをたんけんた」	石本 倫章	体育館
算数	2 A	かけ算	宇田 智津	2 A 教室
英語活動	2 C	何が食べたいの？ What do you want?	辻 伸幸	2 C 教室
国語	3 C	「モチモチの木」	志場 俊之	3 C 教室
理科	4 B	ものの温度とかさ	不野 和哉	4 B 教室
国語	5 A	「わらぐつの中の神様」	須佐 宏	5 A 教室
社会	5 C	わたしたちの生活と工業生産	片桐 宏	5 C 教室
算数	6 B	変わり方のきまりをみつけて	山中 昭岳	6 B 教室
国語 総合	1～6F	縦割り班活動 「きょうりよくプロジェクト」	西村 充司 坂本 桂 辻本 和孝	メディアホール 複式教室 ワークルーム

協議会 (11:00 ~ 12:30)

教科等	場所	協議会テーマ	司会者	助言者
国 語	3年C組	関連して伝え合い, 「初読力」を育む ~自己変革を確かめながら~	貴志 雅代 先生 (和歌山市立新南小)	武西 良和 先生 (和歌山市立三田小校長)
	4年C組		小杉 栄樹 先生 (和歌山市立西脇小)	津田 修吾 先生 (紀美野町立下神野小校長)
社 会	6年A組	全体学習につながるひとり学習の充実 ~一人ひとりのまなざしを大切に~	市川 圭造 先生 (和歌山市立雄湊小)	片桐 清司 先生 (元和歌山市立有功東小校長) 川本 治雄 先生 (和歌山大学)
算 数	2年A組	子どもがつなげる算数科学習 ~思考の「ずれ」を意識して~	高石 順弘 先生 (和歌山市立安原小)	前田 忠 先生 (和歌山市立砂山小校長)
	4年A組		田中久美子 先生 (和歌山市立雑賀小)	遠藤 秀機 先生 (附属中学校長)
理 科	6年C組	『感動』体験を通して, 問題を解決 する過程を楽しむ子どもを育てる	山本 眞喜 先生 (和歌山市立八幡台小)	中原 徹 先生 (岩出市教育委員会指導主事) 宮永 健史 先生 (和歌山大学)
生 活	1年A組	五感を通して感じ, 表現する生活科	村中 保憲 先生 (和歌山市立西和佐小)	辻 民子 先生 (和歌山市立四箇郷北小校長)
音 楽	第1音楽室	《ことば・動き・音》を関連づけて 音楽の基礎・基本を育てる	山本 茂子 先生 (附属中学校)	林 和美 先生 (和歌山市立名草小教頭)
図 工	1年C組	「感じる」「表す」学びの連鎖」	池浦 雅子 先生 (和歌山市立八幡台小)	谷澤 佐規子先生 (和歌山市立楠見東小校長) 永守 基樹先生 (和歌山大学)
家 庭	5年B組	生活を実感し,工夫する楽しさを味わう 家庭科学習 ~学習を生活に生かそうとする子どもの姿をめざして~	小竹 和美 先生 (和歌山市立高松小)	坂本 記美子 先生 (和歌山市立雄湊小校長) 細谷 圭助 先生 (和歌山大学)
体 育	3年A組	運動の楽しさを真剣に学ぶには ~学びあえる学習集団を考える~	明渡 良夫 先生 (和歌山市立小倉小)	三上 滋樹 先生 (和歌山市立貴志南小校長)
複 式	複式ワーク ルーム	個と個がつながる 主体的な複式の学び ~認め合うかわりを大切にして~	松尾 浩一 先生 (和歌山市立広瀬小)	岡山 末男 先生 (田辺市立二川小校長) 東田 明治 先生 (有田川町立五西月小教頭) 宮本 茂 先生 (和歌山市教育委員会専門教育監補)
英 語 活 動	2年C組	コミュニケーション活動を通して, 伝え合う喜びを味わえる英語活動	田中 雅子 先生 (和歌山市立広瀬小)	東 悦子 先生 (和歌山大学国際教育研究センター)

研究概要発表 (13:45 ~ 14:30)

「意味と内容」がひろがる学びの創造 (3年次)

互いのまなざしが響き合う学習 ~一人一人への確かなみとりと支援によって~

研究企画長 志場 俊之

講 演 (14:30 ~ 16:00)

演題 「協同的な学びによる授業と学校の改革」

東京大学大学院教授

佐 藤 学 先生



「ありの行列のなぞを解こう」

～ 説明文の読み取り方「ありの行列」～

国語科

3年C組

担任 志場 俊之



初読力の大切さと自己変革の確かめ

初発の感想は、物語文の場合、感想や疑問が主題に迫ることのできる場面や情景に対して出したものであるかどうかで、初読力の深さや広さを捉えることができる。説明的文章の場合も、初発の感想で、子どもたちが書くのはやはり驚いたことや疑問に思ったことが多い。ただ、説明的文章では子どもたちに求める力を内容の理解に置いているので、合わせて、「どんなことが書いてあったか。」を短くまとめさせて初読力を見る必要がある。

私たちは、生活の中で情報を手に入れるために、その8割から9割を占める説明的文章から、一読して文章の内容を読み取ろうとしている。生活の中では一読して文章の内容を読み取ることが不可欠なのである。そこに私たちが初読力を大切にしている理由の一つがある。

自己変革の確かめについては、「どんなことが書いてあったか。」のつかみと、最後にどのような内容の話であったかまとめたものとを比べさせたい。そこでの自己変革は、説明的文章の場合、物語文に比べて客観的であるし正誤を判断しやすいため、成長を明確に自覚することができる。自己変革を確かめさせることで、自分の読み取りの甘かったところに気づいたり、文章の構成の仕方を意識したりできると考えている。

説明的文章の読み取り

とかく説明的文章の学習になると、どこで区切れるかとか要点はどれかとか、そんな問いばかりの固い学習になりがちである。それは、論理的な思考力をつけようとするあまり、直接的な問い方になってしまうためであろう。言葉の上だけの理解では本当に理解したことにならない。日常の生活や事実、経験などに近づけられるようにすることで実感を伴った理解ができるのである。

たとえば、ウィルソンの行動に対して感想を持ったり、なるほどと思ったりしたことを出し合うことで、的確に読もうとする態度や能力が身につくのではないだろうか。実感して初めて、ありに対して親しみを感じ、それを表現した文章を深く認識し、文章全体の書き方を知ることができるのである。

自分も実験者になったつもりで、ウィルソンの実験・観察から次の実験をする妥当性を見出し、研究しようとした訳や内容、分かったことなどについて伝え合い、共感し合うことで、文章の相互関係や文章構成、要旨などの理解ができるのである。

何も要点や要旨、小見出し、区切り、文章構成などの学習を悪いと述べているのではない。ウィルソンの思考過程に寄り添って、自分も昆虫学者になったつもりでありの行列のできるわけを考えながら読むことで文章構成、要旨も自然な形で理解していくのではないだろうかと思っているのである。

この教材を学習することを通して、普段生き物に目を向けられない子どもたちにはもちろんのこと、生き物に興味をもっている子どもたちにも、生き物がもっている本能の中に、人間の能力を超えたすばらしいものがあるという驚きを感じてもらいたい。また、自然のすばらしさを感じ、自然とかかわっていきこうとする姿勢をもってもらいたいと考えている。

子どもの問いからの学習の組み立て

1. 初読力を大切にす

初発の感想を書かせるとともに、どんな内容の話で合ったかを書かせ、最後にどのような内容の話であったかを何らかの形でまとめたものとを比べさせることで、自己の変容を意識させる。意識できた力がまた、次に出あう読み物への初読力となる。

2. 文章構造をつかむ

「ありはものがよく見えないのになぜありの行列ができるのか。」という子どもの問いに対し、答えの文を探すことで と の関係を理解するとともに、 ～ の文に目を向けさせる。

3. ウィルソンの論理的思考に寄り添いながら読む

「ウィルソンは、ありのふしぎを見つけ出してすごい。」「ありも頭がいい。」という子どもの感想をもとに、段落から入る。段落を起点として、道しるべをつけたと考える根拠から道しるべを証明するための研究に至る過程が述べられていることから、 から をウィルソンの思考に寄り添いながら読むことで、それを突き止めていく研究者の論理的思考過程を理解させる。

4. 互いのまなざしの響き合いを生む

ありのすごさに興味を持っている子とウィルソンのすごさに興味を持っている子の意見を絡み合わせることで、互いの視点から見たそれぞれのすごさを伝え合い、子どもどうしの響き合いへと迫る。

5. 分析的に読む

「蒸発してしまうとにおいはとんでしまうのか、それとも残るのか。」という子どもの疑問から言葉にこだわる読み方を学ぶ。実際においをつけているありの絵を書いている子が数名いた中で、行きも帰りもおいをつけている絵と、帰りだけにおいをつけている絵に分かれた。文章の細かいところにも着目し、正確に読むことを学ぶのである。

複式学級における理科学習

～学年別指導の在り方を探って～



5・6F担任
辻本 和孝

1. はじめに

本年度より、附属小学校の複式学級では理科・社会の学習においても、国語や算数のように直接指導と間接指導を進める学年別指導を行っている。主にそのカリキュラム作成と実際に授業を行ったときにどのような成果と課題があるのかを探っている。しかし、本年度は移行期ということで、完全に学年別指導というわけではないが、可能な限り5・6年生で関連する単元同士を同じ時期に配列し、異学年の交流にも期待しながら進めている。

2. 学年別指導の長所と短所

和歌山県下の複式学級を持つ小学校では、理科・社会についても学年別指導を行うようになってきている。どのようないきさつから学年別指導を行わなくてはならないのか現在調査中である。しかし、以前からもAB年度方式の短所として挙げられてきた「転出入（特に転出）に対しての対応が難しい。」という理由が一番ではないだろうか。その他にも「下位学年の児童にとっては、経験差が生じてしまう。」という理由も考えられる。いずれの理由であっても学年別指導を行っていくのだから、その長所と短所も考えなくてはならない。参考として啓林館がホームページ（<http://www.shinko-keirin.co.jp/rika/index.htm> 新興出版啓林館）で紹介している「複式のカリキュラム作成にあたって」をご覧ください。（本校の複式学級における理科学習のカリキュラムについては研究会で紹介する。）

そして、その短所を補うために次の4つが有効であると考えられる。

コンピュータ等の教育機器の有効活用	学習形態のグループ化
ひとり学習におけるワークシート類の工夫	学習訓練による学習パターンの定着化
子どもたちが主体的に学習を進められるような単元構成の工夫	

3. 1学期の実践より

本年度1学期の実践では、上記の～のうち～について力を入れてきた。特に～の工夫として、実体験を伴うような単元構成、～の工夫として、実際に見ることができない現象をビデオで見せたり、お医者さんのインタビューをDVDに編集して見せたりした。その実践について紹介する。

5年「ヒトの誕生のヒミツ」



ヒトの誕生について学習する単元である。調べ学習をして知識を身につけ理解を深めることが中心になる単元であるが、より身近なものとして、また、自分のこととして考えられるように、体験を多く取り入れた。

単元の導入では妊婦さんをゲストとして招き、胎児の動くようすを肌で感じ、心臓の鼓動を聞くことにより、妊婦さんのお腹の中で小さな命が育まれていることを理解した。また、妊婦体験も行い、妊婦さんの大変さに気づき「私も将来こんなふうだったのか」「私も将来こんなになるのかな？」と感想を述べていた。

単元の後半では、子どもたちは、精子と卵子が出会い受精するシーンや、胎児がだんだんと成長しヒトの形になっていく様子をビデオで見たが、実際には見ることができない現象なので、「精子は一生懸命だ」「だんだんとヒトになっていくんだ」と感想を述べていた。



6年「ヒトや動物の体のヒミツ」



ヒトや動物の体の仕組みについて学習する単元である。呼吸の仕組みではガス交換について、消化吸収の仕組みではだ液のはたらきについては、実際に体の中で起きていることを予想し、実験・観察によって検証するという流れで学習を行った。だ液のはたらきで

は、「日頃は何も思わないで食べていたけど、だ液がこんなにはたらいていると知って驚いた」という感想もあった。実際に実験・観察できない内臓のはたらきについては、一人一人が調べ学習を行い、全体での話し合いによるので、もう少し詳しく知るためにお医者さんによる解説も取り入れた。実際に来ていただけなかったが、インタビューをDVDに編集し、それを見ることにした。

単元の終わりには、今までの学習を自分のこととして考えるために、自分の内臓がどのようなになっているのかを、模造紙にまとめた。



実践の成果と課題

今回の実践では、体験することをたくさん取り入れたが、子どもたちは学習対象に興味を示し、単元の最後まで主体的に学習を進められた。また、ビデオやDVDを使って実際には見えない現象を見ることで、子どもたちの知識・理解は深まったと思われる。また、お医者さんのインタビューも5Fの児童のお父さんということもあって、しっかりと聞くことができ、知識・理解を深めた。しかし、これだけでは学年別指導の短所を改善できなかった。「わたり」の指導や子どもの思考活動の連続についてはこれからの課題である。

今後は～についても同等に力を入れ、実践を通して検証していきたい。

異学年交流として

今回の学習での異学年交流としては、5年生が調べたことをまとめて6年生に紹介するという活動が挙げられる。5年生はうまく伝えようと分かりやすく絵で表し、発表時の声の大きさや速さにも気をつけていた。6年生はその発表を聞いて、質問したり感想を言ったりした。その中で、栄養のとり方について「胎児は胎盤とへその緒からで、ヒトは小腸からと同じ人間でも違いがあるんだな」という感想があった。単元は違うが、栄養を取り入れるという共通点を見つければ、同じ人間でも栄養の取り入れ方が違うという違いにも気づけたのである。これは、よく似た内容の単元同士を配列した効果ではないだろうか。

今回は調べること、話し合うことが中心の単元であったが、5年生・6年生ともに実験中心の単元同士を配列した場合、安全面や教師のはたらきかけという面でどうなるのか、これから検証していきたいと思う。10月28日(土)の研究会では、実験中心の単元で授業を行う予定です！

一人読みが充実！付箋を活用したワークシート

～ 1年生「おむすびころりん」2年生「スイミー」の実践から～



1・2年F組 担任 西村 充司

2年生：「スイミーの元気度チェック！」

5つの場面毎に本文を貼付した付箋の束を配布。元気度を考える上で手がかりとなる文や言葉に線を引き、なぜその元気度数にしたかの理由も書きながら、一人一人が自力で進めていく。

一人読みの段階では、3場面の元気度を最高の5近くまで上げている児童がいた。『けれど、海には、すばらしいものがいっぱいあった。おもしろいものを見るたびに、スイミーは、だんだん元気をとりもどした。』ことでそう考えたらしい。みんなでの練り合いの中で出た「お話全体の流れを考えたら」の発言にその子も納得し、子どもたちは一旦3場面を3と4の間とした。そこで、「1場面を3と決めたよね。今は『だんだん元気をとりもどし』ている途中だよね。」と指導者から揺さぶってみたが、子どもたちにとっては、海の底の生き物たちを彩るレオ＝レオと谷川俊太郎の豊かな表現が勝っていたようで、ここでは変容は生まれてこなかった。

ところが、次の4場面に入って、やっと先の見通しがついてくる。「3場面より4場面の方を1上げたいし、5場面ではさらに1上げたい。だから3場面はちょうど3にまで下げたい。」との女の子の発言に頷く子どもたち。結局、1場面は基準の3、2場面は大きく下げて1、3場面で再び3にまで上がり、4場面4、5場面5へとアップさせ、お話の展開を大まかにとらえることができた。

子どもたちは自分が初めに考えた元気度が分かるように印を付けた上で、こんな話し合いをしながら付箋を好きなように移動させた。一応決めていく黒板での元気度通りにしなくてもいいことを確認し、仲間の考えの良さを認め合いつつも、自分の思いを大切にしながら学習を進めていった。

5場面	4場面	3場面	2場面	1場面	5 4 3 2 1 0 1 2 3 4 5
資料は指導者の予想した元気度チェック					スイミーの元気度チェック！ 2年F組 （黒板に貼付した付箋の束を動かして元気度をチェック）
まずは1場面を全員で考え合い、方法や基準について意思統一する。					
一人読みの後の練り合いでは、4と5の間か5かなど、細かい度数の違いで話し合いが白熱することを避ける。大事なのはスイミーの大きな元気度の変化を考え、そこから場面の移り変わりを捉えること。					
考えの根拠を大切にすること まなざしの共有がより進む。					
まなざしの共有がより進む。					



1年生：「おむすびころりんのさしえとぶんをじゅんばんにならべよう」

8	7	6	5	4	3	2	1
おむすびころりん							
挿絵の拡大版							
ぶんをはらう							
本文の拡大版							

1年生の子どもたち全員が「おむすびころりん」を知っている。左はそんな実態から生まれたワークシートである。まずは、8枚の挿絵の拡大版を順不同で黒板に提示する。全員黒板前に出て思い思いの理由を口にしながら協同で並び替える。席に戻ったところで、白紙のワークシートと8枚の挿絵を貼った付箋の束を各自に配り、「黒板と同じように一人で貼ってみようね。」と呼びかける。できあがったところで、「ここまでは準備体操だよ。次からが本番！」と言いながら、段落毎に本文を貼ってある9つの付箋の束を配布する。「この、文の付箋も順番に並べるよ。手がかりは？」と問いかけると、「文をよく読む。」「絵も見て比べて考えていく。」と子どもたち。「じゃあ今度は一人一人やっていこうね！」

ところが、さっそく「できない。」と助けを求める男の子と女の子。1つの段落の付箋を手に取り、「一緒に読んでいくよ。」と3人で声を出して読み、「この文の内容にぴったりの挿絵はどれ？」と尋ねる。「あっ！」と思わず感嘆の声を漏らした女の子に、「分かったことを男の子に教えてあげてね。」右の写真の通り、黒板の挿絵を指さしながら真剣になにやら教えてあげ、やがてそれぞれの活動に。しばらくして、「なんや、かんたんや。」と素直に喜びを表す男の子の明るい声が聞こえてきた。

手軽に移動できる付箋は、挿絵や本文の並び替えの際、「あっちかな？ こっちかな？」と試行錯誤を繰り返す子どもたちの学びにピッタリのアイテムであった。

みんなの考えをもとに本文の拡大版を順に黒板に貼っていく際、「『むかしむかし』で始まる文が1番。」「『なかよくたのしくらしたよ。』の文は、最後。昔話の終わりは大体こうだから。」というように、昔話の特徴を確かめることができた。そしてもちろん、本文をじっくり読み、挿絵とつなげて考える一人読みと全体学習も実現できた。



小田 章 先生 和歌山大学 学長

AKIRA ODA

専門分野：ドイツ経営学，企業体制論



個人を重視した企業組織・企業体制について、とくに企業において数的に圧倒的多数を占める従業員の利害を守ることの可能な企業組織・企業体制とはどのようなものかを研究されています。

このような研究をされている中、今の学長という立場、さらには我々教員と同じ「教える」という立場で小田先生が教育についてどう考えておられるか、また小田先生の専門分野から教育に生かせることなど、長時間にわたり語っていただきました。我々小中学校の教員も傾聴に値するたくさんのエールを送っていただいたような気がします。とともに、たくさんの元気ももらいました。その元気の源を2回にわたって皆様にご紹介いたします。

高校の野球部の大先輩であり、学生時代も硬式野球部顧問としてお世話になった関係上、途中大阪弁や後輩に語りかけるような口調となっており、そのまま掲載させてもらいました。 [聞き手：らいぶ編集部 山中 昭岳]

何よりも相手の立場に立つことが大切！！

山中：我々教員と同じ「教える」という立場において、小田先生はどのようなことを大切にされていますか？

小田：相手の立場に立つことです。学生の立場に立って、いろいろ考えることが大事で、一方通行はダメだということです。

山中：具体的にどのようなことをされていますか？

小田：具体的にああやこうやということは難しい。やっぱり気持ちの問題ですね。今、学生が何を求めているのか、それを知ろう、探ろうとする気持ちが大切だと思う。小学校、中学校にはそういう気持ちを持った先生が多いように思いますね。

教師は聖職者！！

小田：山中くん、やっぱり先生は聖職者や。先生は労働者が聖職者かという議論があるが、やはり聖職者だと思うし、そうありたいと私自身は思っています。だから、教職にあるものはもっと気概をもたなければならぬ。社会的にも名誉で崇高な仕事をしているという気持ちをもたないとほんとうに生徒さんを教えることはできないね。

山中：先日、田舎の祖父母に会ってきたのですが、私が教師になったことをとても喜んでくれていました。

小田：やっぱりね。先生は尊敬されなあか体で覚えて、頭でつかえ！！

小田：小さい子供達にも良いことと悪いことの違いをしっかりと教えなければあかんと思う。度を過ぎたらあかんのやけど、悪いことしたら叱られる、罰を受けることをしっかりと言い聞かせ、体でおぼえさせるようにしなければならない。

僕の持論なんだけど、スポーツは体で覚えるというよね。頭で覚えるより、まず体で覚えて、その後、頭を使ってうまくいかしていく。小さいときの勉強も体で覚えていかなければならぬ。今、スパルタはダメ、勉強もよく考えて考えてと言う人が

山中：今の学生さんたちはどうですか？

小田：30数年大学の先生の職にありますが、自分で勉強しよう、自分で何とかしよう、勉強するかしないかではなく、自分でなんとか自分の道を見つけていこうという学生が昔は多かったように思います。が今はそれができない子がほとんど。10年くらい前に指示待ち族という言葉がはやったけど、まさにそうやね。これをしなさい、あれをしなさいということとできるんだけど、自分で道を切り開いていくという気概というか意欲のある学生さんが少ないね。大学の先生もそういう学生さんに意欲をもたせるような指導をするか

んね。学校の先生というのは地方では名士なんだよ。当然、都会でもそうあるべきだけど、そうはなっていないね。社会からもっと尊敬されなければならない。最近、先生が非常識なことをやると、「あの人、学校の先生やから何も知らはらへんね」というように揶揄されることが多い。世間知らずが多いというように見られている。これはまずいね、世間の皆さんからさすが学校の先生は違うなという見方をされないからね。地方では、先生は尊敬されている。非常に偉い人という。都会に行けば違う。先生をみる目が違う。そこが問題で、都会で

多いですね。それは大事なことから否定はしないけど、小さい子に算数を一生懸命考える、国語を一生懸命考えると、その時に基礎もなく考える力も希薄な子供達には無理な話と言えるわね。漢字でもたし算・引き算、社会や地理、どれをとってもまず体（頭もその一部）で覚えることが後々生きてくると思っています。頭で覚えたことは忘れるけれど、体で覚えたことは幾つになってもちゃんと残っているわね。できる限りのことは体で覚えること、応用はその後頭で考えてやっていけばい

い、それも旧態依然なんですね。だから、先生も工夫が必要ですね。大学の先生は研究センターの人が多く、学生との接点があります。希薄になってきています。あまりいい傾向ではないね。だから、大学も教育面をもっと重視しなければならないですが、それ以上に小中学校での教育が大事。先生方に、今の子どもたちが何を考えているかをきっちり把握し、自分の手で自分の道を切り開いていくことができるような子どもさんを育ててもらいたいですね。小中学校の先生方に期待しています。

も先生は素晴らしい人だなと思ってもらえるような働きをしなければならない。そうしないとますます学校が衰退・退廃していく。だめになっていく。その結果どうなるかという、生徒にとってマイナスになる、もっといえば将来の日本社会がどんどん悪くなっていく。そういう意味では小中学校の先生は重要な職務を担っている存在であることを強く認識して頂きたいですね。私は、その職務は大学の先生よりはるかに大事だと思っています。これが、先ほど言った期待しているということにつながるんですね。

いわけで。それが小学校の低学年から体で覚えようとしなくて、頭でやろうとしているからね。まず、応用からやろうとしている。人間が通常の社会生活を送るための基礎は、読み・書き・そろばんであり、これを徹底的にやらなければならないが、それが十分行なわれていないように思います。従って、小中学校でそうした基礎的なことをしっかりと教えることが将来生徒にとって役に立つことになると考えています。

次号では、専門分野から教育に生かせるお話をご紹介します。お楽しみに。

食に関する指導の充実を目指して

～ 学校給食献立を中心として ～ 栄養士 神山 求実



「生きた教材」となる学校給食・・・

学校給食は、共通した「食」を同じ空間、時間の中で、実際に五感を使って体験できる良さをもっている。また、毎日の学校給食を通し、繰り返して継続的に指導していくことで望ましい食事のとり方や食事マナーなどの習慣化を図ることができる。

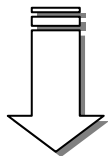
学校栄養士がつくる献立には、様々な思いや願い、指導のねらいが込められている。毎日食べる学校給食を、子どもたちの「生きた教材」として食の指導に活用してほしいと考える。そこで、本校では、教科と関連させた食育指導を進めるため、全体計画及び食材を含めた年間献立計画をもとに実施している。

教科と関連・・・「ふきのとう」(国語2年上光村)

献立名：ふき入り炊き込み寿司、つくねだんご、煮物、わかめのみそ汁、アップルゼリー、牛乳

学校給食の中に子どもが学習している(したことがある)教材を取り入れることによって、その学習への興味・関心につながるだけでなく、「食」への興味・関心が高くなっていく。「ふきのとう」もその一つである。日ごろ食べ慣れていない「ふきのとう」そして、「ふき」が、教科学習と関連づけることで、子どもたちにとってはより魅力的な教科の学習、食材となった。

栄養士から発信する
給食指導のねらい



5・6年生の委員会活動時間に食育コメントをヒントに放送内容を考える。
(伝える学習)

食育コメント(献立表に記載)

春がやってきましたよ！私たちのまわりには、春を感じるものがいっぱい。春の訪れを告げる「ふき」は、湿気、日陰を好み野山に自生します。冬に黄色の花が咲くことから冬黄(ふゆき)と呼ばれ、それがつまって「ふき」という名がついたそうです。2月に給食で食べた「ふきのとう」は、花の部分です。今がおいしい「ふき」の部分は、葉や柄ですね。

給食応援団による放送内容

2月に食べた「ふきのとうの天ぷら」を覚えていますか？とても苦かったことを思い出します。あれは、「もうすぐ春がやってくるよ。」「雪が溶けたよ。」と春がすぐそこにきていることを知らせてくれたメニューです。

今日は、「春が来たよ！」と春をお知らせするメニューです。ふきの柄の部分を食べます。

～食べて！見て！さわって！楽しむ給食～

2年生の子どもたちは、声をそろえて「1年生のとき給食で「ふきのとう」食べたよ。」「2月の終わりごろだったよ。」「とても苦かったよ。」「花のつぼみを食べたよ。」食の体験を国語の学習時に発表した。また、食材「ふき」をさわることによって「ふきの柄の部分には、スジがいっぱいあるよ。」「葉っぱも食べることができるよ。」「春を知らせる食べ物、もっと知りたいな。」子どもたちの学習意欲が、「教科」にも「食」にも高まった。



From Editors

トップページでご紹介しました教育研究会を10月に開催します。ふるってご参加ください。
詳しい情報は本校HPをご覧ください。

和歌山大学教育学部附属小学校

〒640-8137 和歌山市吹上1丁目4番1号
TEL (073) 422-6105
FAX (073) 436-6470
URL <http://www.aes.wakayama-u.ac.jp>
E-mail fuzoku@center.wakayama-u.ac.jp